

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100



繪本豊臣勲功記

三編  
五



門へ遠13  
號2209  
卷25

繪本豊臣勲功記三編五之巻

目録

木下襄多藝集國司親戚

属獻義信長

信長義使親國司諱和賀

属勢別年稿



鐵田徵帥大軍進發越前

屬金湯昇城

朝倉景恒猛勇血戰追軍



繪本豊臣勲功記三編卷之五

江戸 櫻澤堂山編輯

木下總多義集國司親戚屬執義信長

火の陽少してまたく熾く。水へ陰少していよく溼る。然ども是と爾て  
及ばず。火強の水弱小勝こと徳をば。明智猛勇をとひゆる。いりでう木下小  
名ぶけんや。光秀疏小秀吉グ諱せりちゆる心みだへ自己グ智ソリテ則  
自己セ惑セモナリ。然る小太將寛勇こきば更小明智バ過失セ咎めば。是  
小よりて光秀も往來の面目を施シタゞ。諸君木下藤吉郎ハ智計セ良  
の名士あきび。一つの謀計セ工支一出し。幸希城共四五人を活捉す事  
ありひなまび一應信長小内意セキ。秀吉ミヅクら北方カラ坂井右衛門秋成  
部が陣石小到て密小計議セ謀合セ。廣坡に於て自軍は陣外鹿垣のをふ

伏矣。乃置木下勢と伊勢武者の像く手捨せ。織田の陣不、夜敵をも休  
小己主と料理。ま夜の寅と過る利。織田方の陣中、小種火一時ふ燃。織りしが  
陣を、金車小發動し。夜敵入らず出合よと、味をもく減を揚。安院九郎と  
向せず。戦ふと城を見えり。もとを進むの陣中へ再び將佐の軍を。  
夜敵をかと賞てす。城をよりも隊を合せ。織敵は自軍を援助よやと。  
毛尾、尾崎、大東、水谷、式部、自勢を率異軒へ、發進。其の構下、鹿垣と。  
擊破らんと、かゝる小ぞ。陣中によく散乱す。通惑を負ふ小見くらひと、バ城  
をますく號掛ひ。鹿垣の豫へども而てよく視るて、織田の陣中。信号の  
一槍放へ。埋伏かくる坂井、秋藤。右一發小發起。城を軍を利得。  
攻起。左巴鐵田の陣中。發動。もうち止ふ。城をあまひと、轟く附もふ。  
陣中一突と轟きて、生鑿歎不せと接どり。城を大小慌忙。備へ進む。

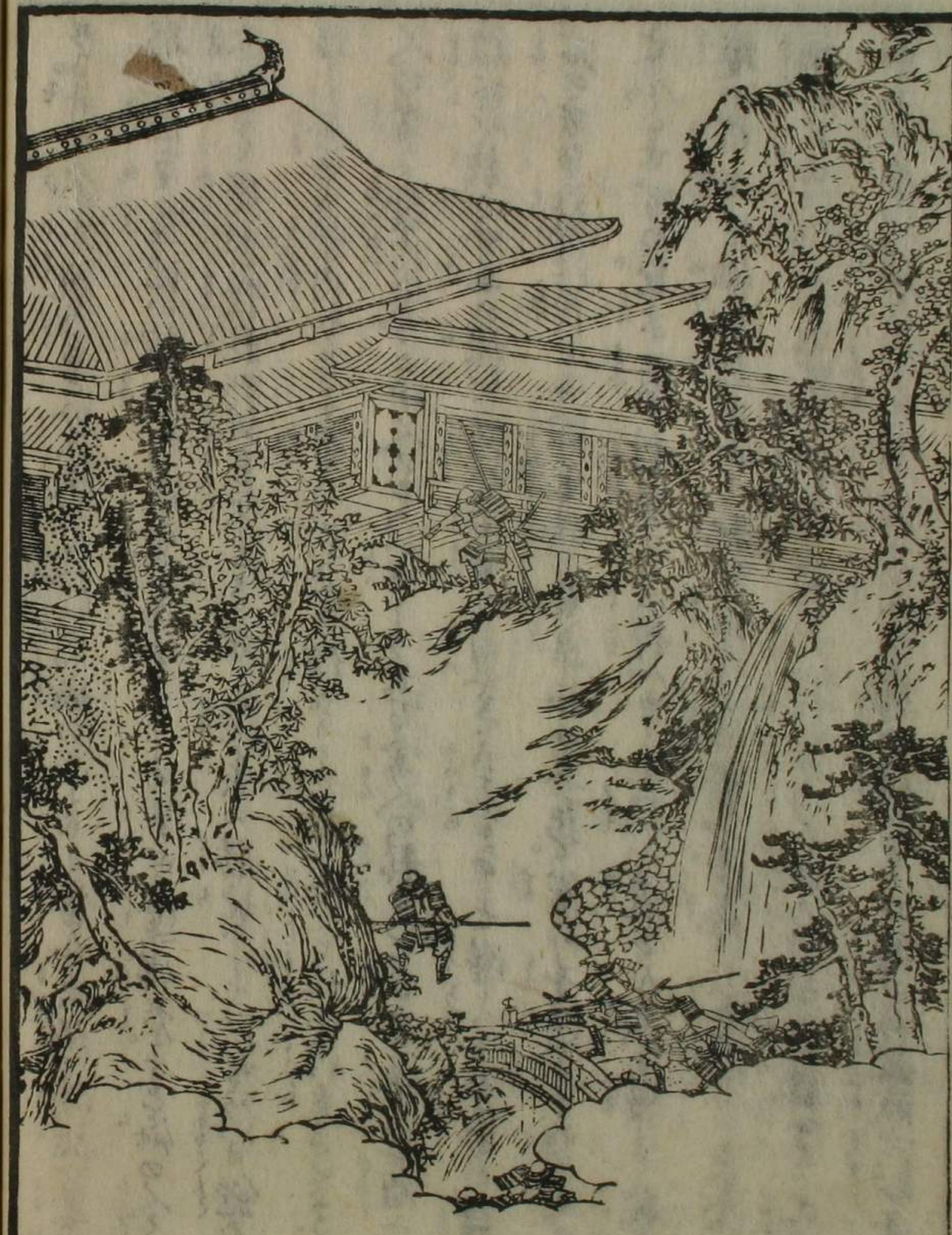
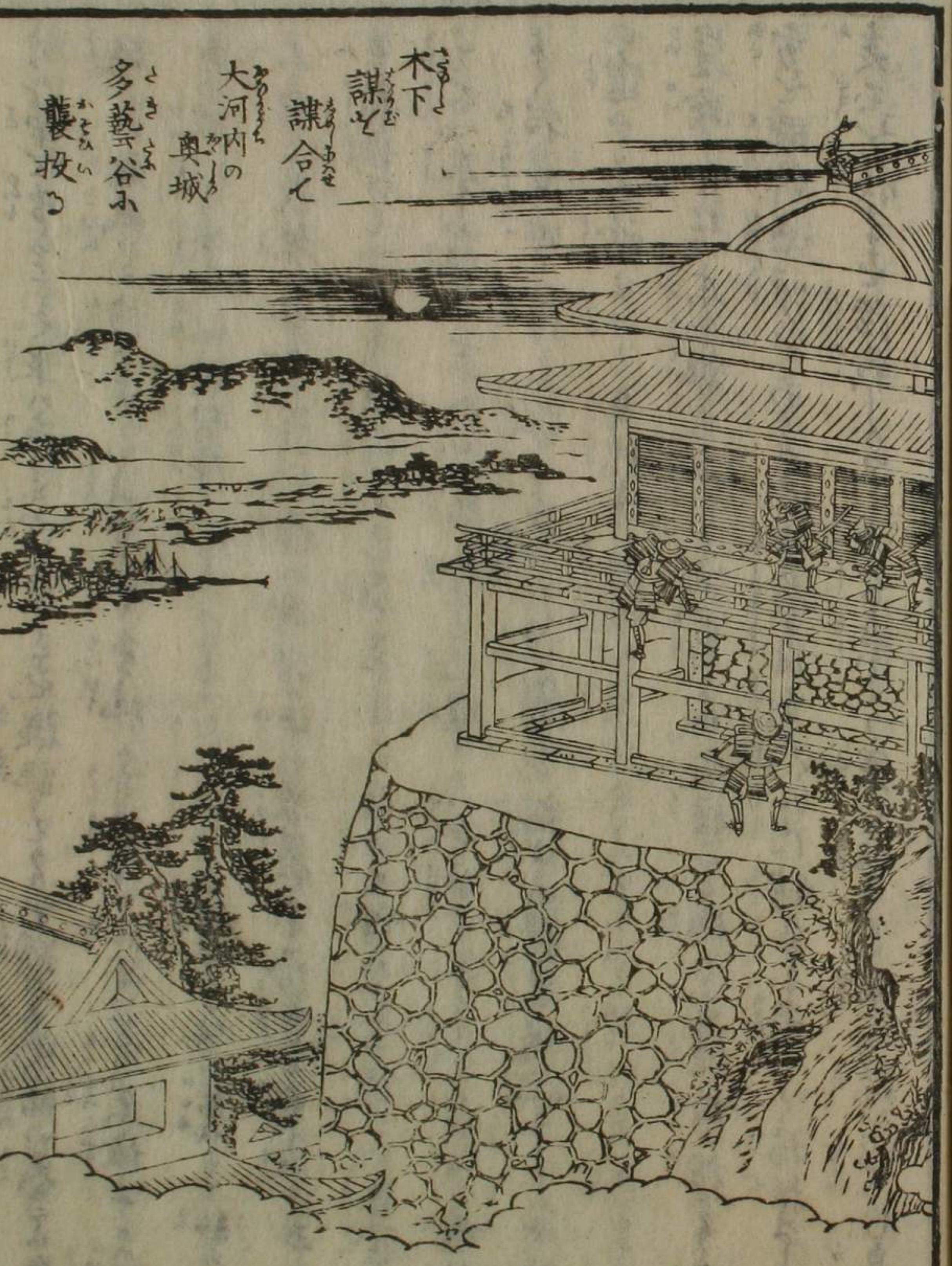
謀計をし、晩還返せと。峰とうつ。右側左倒ふ。遅晩と。木下。坂井。畠山。備  
一隊小笠て追。義々。頼之。指揮せ。事形。小笠。城中。諸士十里五人。傷  
つけぞしてあると活捉。秀吉が前小笠居を。小笠を。軍へ。運用す。追廻  
からざと。諸勢を制し。生捕の軍を。擊起。陣所。小笠。夜。秀  
吉。虜の兵士。ひとり。一個。擧出。綱を解く。厚く。勞り。酒食。全般。と多  
く賑。興。朝を和らげて。裏。國司の。簾。申。一族。諸將の。事。不。脊齶  
だ。小笠。安。す。海。们。宣。めて。細。て。有。付。怪。小笠。が。そ。然。あ。胸。が。遠。上  
小も恩賞。と。得。き。そ。帰。が。し。と。展。於。縣。と。翰。を。小。紳。の。うち。ひ。存。せ。ぬ。と。て  
實。と。明。さ。ぬ。軍。も。あり。しが。酒。闇。小。笨。ぬ。と。が。軍。凡。軍。の。習。乳。と。て。躊。慢。話。と  
ある。も。あ。る。答。應。總。の。深。切。う。情。義。小。辯。さ。と。理。然。と。左。活。如。と。報。け。る  
小。よう。蘇。古。而。大。小。兵。悦。再。び。復。兵。の。敗。貨。を。施。捨。み。己。主。と。陣。中。小

謀略の  
種小せんと  
木下城兵と  
虜ふひ



秀吉一個本陣小參り。活捉の軍を自慢せし中興小主若へ言はば  
一にて此より方便を設け。高橋義重をもさしむべし。伊勢栗原村の遠くに  
御心寧くかがさまよと本地の陣石へ駆て返り。活捉の軍は軍賞を税  
せ。潛行小憩疎矣したる。士十二人を擇出し。被軍冒とこき候小兵を。城中の  
の兵士小手拾せ計図を異小謂令也。國司の簾中諸士は妻子を安置  
たる多慶若の裏うち別館當てぞ起せぬ。彌小是十二人の勇士達へ諭  
祖絶壁を涉る縛。龍獣の像く招き。或の敵の陣不セ通宵。或へ山嶺を絶  
旋て能なく多慶若館小到。路條の引導隅々まで割りく閑徹し。十三  
人のうち一人は木下の陣へ近づ。途中後隊小生をひし。秀吉若び遠事と  
信長小言狀。然ば多慶若と鬱様。國司の簾中諸士の妻子を棄損らん  
と計議と定め。十月七日の夜小移き。三十餘人を引率ひ。梢々小船若へ越  
と計議と定め。十月七日の夜小移き。三十餘人を引率ひ。梢々小船若へ越

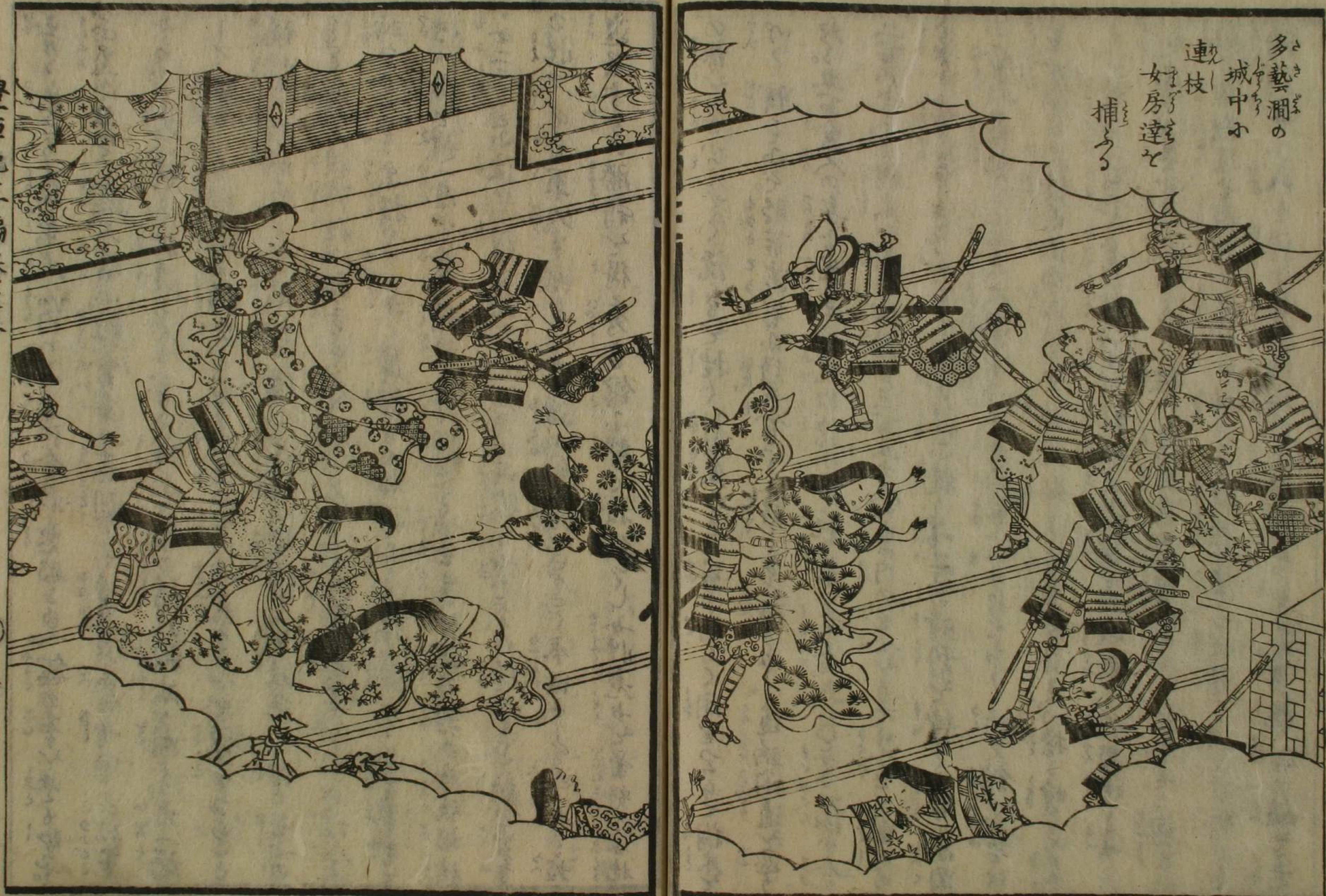
乃ちも遠き鹿谷とのふ玉富ハ大内内城の西南小當り。最極陥没の要崖  
那う。國主遠地小館殿と遠當營幕中不認め男兒達姫君こそも婦の人々と  
安置く。娛樂親れの休息不とも。殊不純素の勝地す。眺望絶日絕景と  
思。然ども案内からざる輩の到みき縛あがれ。秀吉御小徑乘す。三十  
人の者を案内を。三十人の子供中より五百余人の精兵を分多慶若隨一の  
難所。故き。木の根を傳ひ岩角を削ぎ。草薙を草若す。潛よる多慶の館也  
右の方あら林は茂ミ小隙を残る。秀吉御小徑乗す。三十  
せんと木の根を過す。剣頭す。玄糧つゝを。既小窓す。天子隊も。魏邊  
魔の梢碑と御側枝と寄り配と結を攻奪す。玄龜は要崖す。とりへども。  
國司の連絡手を失せ。一族あり。大内内宮内大浦森奉と犯縛す。大浦  
こそ。二年余縛もく守護す。木下秀吉禪す。國司の親戚一門を棄



大軍車とちらそそ軍へ左の三心と要す。撲勝をうそ頭にて曙の天きらゆく  
湧えよ風口す推進せく。減とつうを院と赤幕なる然るに近來城中す。かの  
きの攻門も軍と徒徒對陣て立す。かく近と攻東らんこと。夏すもかうぬ  
不意こひ殊木多氣若む一様ハ陰暗が中の要崖あま。容易来る者をあらじ。  
且籠城のえどえより。欲進来りしゆむかう。用心も稍かごそくらを怠慢する  
を不。本下が勢の二年を。一役す窓と侵進一ヶ。打越くこと大方取る。機密  
よく鷹勢源く。降く。勢の多かも。視徹らを。館中の將車輶忙きものや。欲  
の進す。ぞ。鷹よ力よ鳥院よ。恵眼を空す。上とトと發動せ。然ども要  
崖凌く。れべ。本下勢も志のを失。急より素投こと偶も。徒坡う櫻よう上  
方を瞻仰。嘸叫人をあり。よ。お蔵森を。大い内諸車小巖。一括揮さる。  
矢玉を擣まを。防戦一ヶ。秀吉素す。軍を好す。草小敵と警む。自云

の轡を盛ふ。そく。院主を挂ぐ計策をば。首小向みて聞をつら。セ樹木と  
叶く。怖を少。船若遠台小得。金かく。夥一を。降く。遙响。通と巡う  
た。五百余人の兵士車。まづ。焼ぬ隙。小多。範若へ。走着。五百と又二隊。小分。  
二百六十人を樹木の岡。小仕轎を二百五十人の安井内の兵士せりて先至。セ國司の  
簾。申報。君を。ひき。居ら。候の後。小旋り。喝号の時刻。待つ。高小面。岡  
の合戦。鼓起。と。豈へ。大勢。魯。呼ぶ。高。山。若。小。室。ひ。ち。く。所。え。館。宿。を。け  
去。士。候。も。大。像。面。圓。小。面。ひ。一。セ。能。視。御。と。去。東。さ。く。北。又。の。接。す。時。と。そ。東  
見。よ。こ。號。聲。び。先。と。章。ひ。館。宿。内。へ。射。投。出。令。革。を。六。砍。倒。し。後。放。拂。く。進。ミ  
行。本。下。は。急。士。ほ。く。小。あ。ま。く。敵。は。進。東。し。ぞ。此。方。へ。か。ま。ー。ほ。し。ま。と。城。方。の  
体。小。備。歌。果。セ。國。司。の。連。技。を。解。く。と。諸。將。の。妻。つ。女。從。類。ま。で。一。個。も。残。さ。ぞ  
誘。引。出。す。或。モ。與。小。卑。投。け。或。ハ。獲。擒。小。うち。ま。そ。そ。多。氣。言。の。宿。を。き

多  
藝  
間  
の  
連  
枝  
城  
中  
か  
女  
房  
達  
と  
捕  
う



止り。然とも森本大治内へ退ひて合戦急務の如く。館の事と些も初不。  
正里小堀と戦ひて小館奮争小忌劇しく。諭旨が在所にて。大に事  
やうんと大小勝き。死ぬらんとかり。櫻倉館の傍れ樹木が聞す。火一燐  
して燃出しき。隙隙と猛火と夥々と。城主の方へ吹き下る小矢。傳事方じと  
燒け。散乱をもこと風ふの像し。了得小堅固の要津あざら。傍ぐ管士の  
まゝ起右往左往小船走る。本手不そまう自効せ懲まし。まよて侵入す  
向すぞ。至る所投や。兵車と。聲振みて。槍揮する。小陽ノ新らる。邊々。事多  
傳ひ備せ。越へ度。小竪と。稠密し。復復地。城を。華を。滅多段。小被体。搦体  
を。二度三度。程。小森か。人。内。の。兩。將。も。心。ぞ。う。ん。種。け。ま。と。敵。の。露。ま  
の。壯。小。自。軍。大。軍。歸。ま。て。え。踏。止。り。て。防。ぎ。ぐ。く。本。城。さ。く。通。送。る。故  
進。益。十。手。の。勝。利。と。得。秀。吉。館。小。擊。て。投。辟。ひ。し。女性。老。少。と。景。觀。小。か。抱。

1. 本陣さへと。退避を残す本手は軍士達。館を。素面固く守護せ。う。備前  
吉郎秀吉の國をの連絡達せ。棄取信長の御前へ。出合戦の始終を。言狀  
して。石。草。小。産。營。で。まし。し。ま。あ。遠。遣。國。の。幕。中。ど。と。め。諸。將。の。事。ふ。と  
悉く棄て。張へ。牢城の兵士ハ。勇氣と。厚。自軍ハ。十分の威勢を。添ふ。と  
今。追。响。こそ。我。君。の。御。寛。に。と。顯。ま。と。使。箭。せ。博。中。へ。遣。一。こ。あ。ひ。棄。取。る  
連絡以下。諸將の妻女を。残り。かく。厚。慰。送。帰。し。和。睦。を。勧。め。至。ひ。よ。バ。  
國司不動。次。へ。謂。小。及。を。ば。城。中。の。諸。將。奮。都。て。君。は。仁。義。と。感。涙。し。あり。そ  
賄。し。惟。一。軍。に。御。使。者。せ。き。を。き。無。ぶ。と。勧。め。を。信。吾。得。と。所。し  
召。勵。ひ。恰。も。宣。と。の。ど。も。そ。方。千。事。万。苦。そ。棄。投。る。人。質。を。直。伐。小。送。帰。ま。と  
と。い。う。小。も。少。く。殘。念。あ。と。や。と。宣。ふ。言。葉。の。了。ま。ま。と。本。不。重。ね。て。歸。て。窮。や。う。  
蘆。中。已。下。を。止。を。至。す。君。の。仁。心。顯。ま。と。深。慨。と。質。と。う。と。あ。と。和。諒。と。委。ま。と。

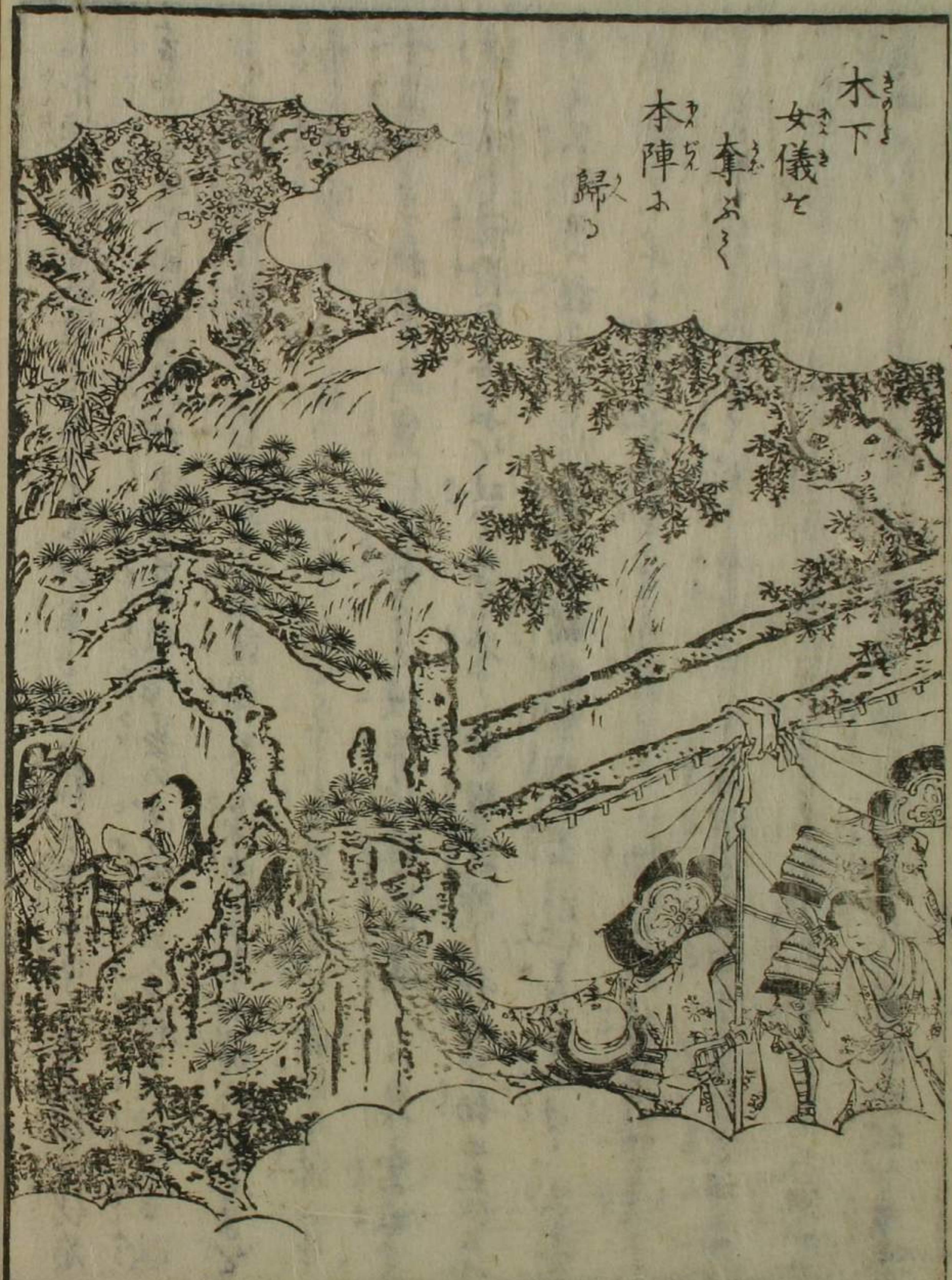
木下

女儀

本陣

奪

歸

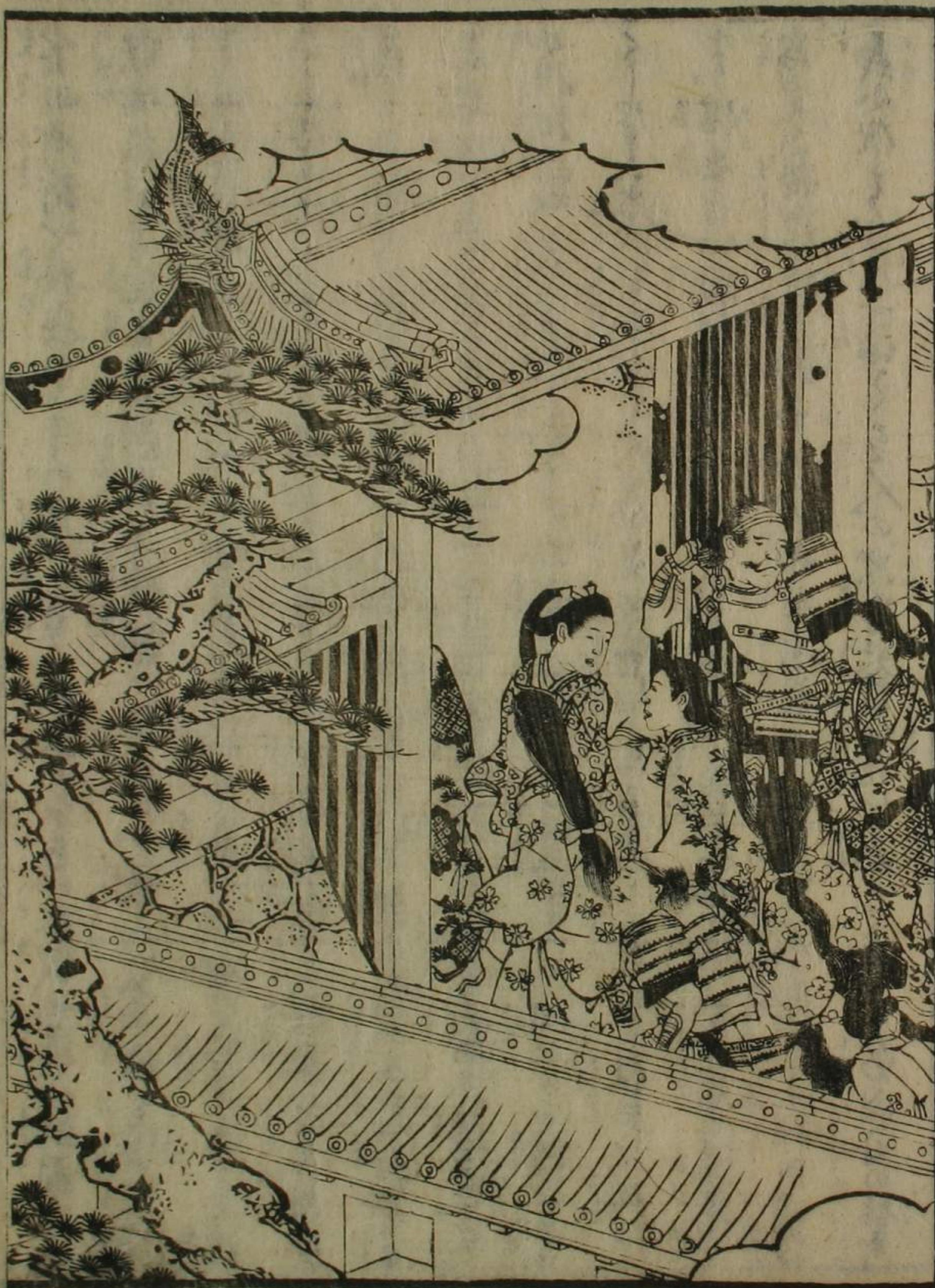


たまふからべ。諸將候うめらぞ恥を顧所。事子の愛小惑觸て國の大事を  
過ぐ。とすく従氣と懲むれ小まづく。使兼と達をらま。本ト恩意の淺  
く。國司は幕中と怖じまわらせ。平陣中と供奉のきども信長へ移る  
軍使と好み。軍小軍の道を繰。重犯とりて貴しと。信み士民を被らし  
て國中の惱を體さん。遂小友家の和睦を料理。合戦を止めらんこそ。せの  
度自のため他社の安泰の基より。軍く怨念と翻。順和の心と起る。と  
命遣一遊をきよ。と初めたてまつる小さう。而使前田又左衛門管若九右衛門  
を便筋と移し。棄する人價と悉く送帰をきけり。

## 信長義使說國司韓和暉属勢別年表

人間の患者ハ生別難小過る。と不得小種を勇士。大内寧株の個こ  
敷せ。一ば實形うと。思ひきども人を出でさせ。むか小忌說き。ねば着うと  
計。請ひも纖回家よう。使者と在り。近寄る。前田管若。福慶小はき。國  
司父子對也。使兼就禮と厚き。終て前田。博多。京。若狭。國家  
の侍人将木下と稟をり。多喜谷の館を改め。御達枝をじめ。諸將の内  
室残しを棄捨る。軍は不意是非。作然。般うち是全く。信長  
の車。意小作を。圓く實く。悉く。送り返す。たゞもうぬ。信長素より北  
萬家小忍あるとのふかあらぞ。遠遣軍を遣せ。事ハ國郡。と。そ。事  
ゆ。去る頃。故將軍。この好だか。小軍。せき。身し。當將軍家。義。兵と。揚らき  
た。あふふと。主。人。信長遠小河。將佐小純參す。忽ち。内侍と。繰。と。そ

秀吉義と  
主君ふ讓く  
女儀と北島へ  
送帰す



宝町漸新と再興をせん。天下を嘗く如事多々六立畿七通小於國をす。  
族倫八のまも純よつて將軍小辞謁。そよるに當城主小畠家。  
王城近の勢州小人任にてあり。始から將軍宣不仕賀も宣へ奉れど。編  
小之好同様の举止をなす。まふよ。遠遣信長荀も將軍詔旨令と  
義。あれ倣の輩と私見ども進榮せしむ。所那。然ども國土聲運小方  
義。あれ倣の輩と私見ども進榮せしむ。所那。されども其がたか小簾中已下。  
民安途と奉意とせし。御も之道の為作とさば。甚ざと小簾中已下。  
如般初難と遙り。尋ねめ。前那と清海あり。將軍小禮と原  
くしまし。領分安全の所。筆業を惜得まし。筆業を小殿草と傷残ん  
よ。信長と和睦とあつた。然あらび主人京都へ参へ。北高家の首尾崇  
政を小料理稟き。因彰云司水若水。肥満の兩病也。生仕も御難  
義。小作さん是小儀と主人の決別。茶釜丸と參り。一朝因司の妹所

小配偶せらきて。所家督と那。京都仕出仕と做させらき。國家解禁  
昌の基をんぬ主人信長初申後とも小決と非通ハつまうらド。倘不遠  
詞セ御得心。雄々數年殊モ久々。是那と歎歎付ひん。今將軍家  
を歎小愛俺们と改暦と至る。鳥辞多々稟條おづら。の縁結きをなす  
在。御茶漸慮申らせらき。御茶承付と申演る。小園司又子茶因  
舊谷小對をセ。船の原をうづけ。似一族諸士車と。御室とて居邊若  
老臣諸士達喜に同意。小連も龍城寛朱をと。和浅こそ萬全形うらめ。と  
諫めらき。小連がと。落び雨使と峰連。才本隼人を值偶。主と若小鐵田の  
陣不へ返否。使寄小連はれ。信長隼人不對面。隼人慎く演すやう。  
今日大將の懇志と。城中同隸生を。條情大の仁あこと重と。と。と。と。

虜ふさらきる。國司の内室女性役下。残さど送殿了縛。和漢不對例を听ぞ。  
追一般忠、織田勘の義信計量小惑服。御禮重を小罰をからを剣將軍家へ  
御詠墨申せ。大罪とも御懲成を赦免ゆじ。うそも御従事する。まこと。  
と主人に属ひと首を頬を言はんまだ信長と名をとて。御喜びゆ。使番と厚く  
齋あせらま累て織田掃射助を便筋己して城中進き。和膳の監物と縁を  
きりまば。國司又子小も大小歡び彌納と堅す。嘗て十月廿二日。兩家純  
和膳食。謂ひ信長諸隊小下陣。退陣させ。然にて  
岐阜小左え。御曹子茶釜丸を車地小峰傍城中進らせたまへ國司又  
子細く心を寧せらき。不知入通禮後して桂瀬山の陣か列。信長不對而  
も因まく國司の指揮をりて船江長寧の倫業をも。様と用をなす。主中  
采柏の政事と布ふ不急休隱居の身もとよりて大泊内城を退き。茶釜丸

加昌也と謀主とね。砲川と御井湯柘植と御たれ毛毛外織田家の勇士多くち  
護のため小附属を備八田城と攻めをする。本下絆と練と宿軍を止めて秀吉を  
づら八向ふ列。理解を深く承さむか。此理小平と橋邊小城と統べ移列  
石山(連)上。蘿繩一東門(連)しめだ。茅三番の今ハ勢弱あふとも小服まぢ地  
も多めとりて某々隅々行政したまひ。伊勢より直地小上治ゆ。將軍家  
小絆褐。伊勢平均の事を言はせ。伊勢御感流らを。豈光は  
御ち刀と賜る。信長次第よけまぶと。禁庭(參内)。敵を御修理と検査  
。のち出精(出精)と見ゆ。素く御諸士へ稟牒さき。十一月十七日祥御と修て糸  
都へ着馬。濃列岐阜へぞ。御体せられぬ  
織田歎帥大軍進。越前属脇と箇峯  
天浦さんば智小勝を。人佐さんば勇小捷を。夫人全く補佐をもる。う

也。木下秀吉が向ふ軍小勝をとり奉事取。然程小信長ハ威勢倍  
盛ふて死地の罪を傍へ。四威小、あじと朝倉と謀叛をすと思ひ奉  
致とも甚と披露小及ばず。清舟の義秋曰く。欲ふも準備をばらまへ  
唯論とすと上洛。不意小城をへ入す。必定勝利をうんとすま。二月十四  
ふゑると考合せ。内裡造営の所候。次々改元御神後のとよと上洛をへと  
指叢せらま。承保十三年二月廿日。波阜珠と出馬す。是。院次と續々  
還宿したる。二月廿日の午前。小糸下小糸を。京都へ向著す。申訴へ出仕へりふもさ  
らぬ。禁中へ參内あらざる時。正午時。小糸下小糸を。京都の還宿日を経る。便  
に小畿内と國の大名諸家次第京都小糸下小糸を。是へ信長の内意あり。誠若  
退治の所。勝利小糸下小糸を。院小總都參を。是。信長今と序  
集りまと。余出されりと。今國郡を有領し。武士のよ旨とする者。いふを盡

遠境。とも。將軍家へ參動を。緯勿論す。従ふ是を思ふべし。却や  
近國隣地を。然ふ小城の朝倉義景。帝教と去こと遠くらむ。境小  
國と。持つて。將軍の御恩小糸下小糸を。他小糸下小糸を。家持と。かよどり。  
態の清貧あると。ども義景一脣もと活せ。北國小城と振ひ。不  
患の至る云語不絶。將軍の御職。そと。形條の者と。御飯あらび。他家  
主と。思ふ。不較意。自由と企望。東と。新しく。静謐の朝。かく。是  
小城と。將軍小糸下小糸を。出馬す。朝倉義景の罪を。犯す。そのうち  
小城七列。將軍小糸下小糸を。遠々退治を。是。時小城。まづ。方達  
隨す。列忠の軍。し。將軍の御恩。小城を。と。余せ。かく。大名小石のつまち  
膜。絆。承。す。いふも朝倉。三年已來。使節を。ごふも。よせぬを。禮。罪を。既

され殊伐ある。衆發小虚隙をも。作成御費向志をもべ。と田舎に同声  
ふ言付し。まよべ。信長喜悦淺うらだ。準備の事を徇出さき。御剣小二  
條の御所へ奉り。御食が禮を稟。一起越志の國小死而ひ。義軍來り。派  
乳さん旨。諸事がまこむ。將軍家不も先達。扶助を乞ひ。由諸も  
あまび疎かがし。もと。方僅信長が。新法天下の軌則。急諸からね。上む  
事と得。ぞ。詠さきだ。信長謹んぐ。御奉り。御所を退出す。自ら。連胸  
既小改元ありて。元龜元年と。草め署す。信長軍馬全備。六月廿日  
立。辰未來小京都と進叢あらせられ。江別城を小於く。勢列位。總都の軍  
兵を。集ま。十萬余騎と。記籍す。當日。江田小矢陣。而。翌三爻廿日。若  
利。被川。小矢せたまひ。松宮。玄蕃の館。小御入。次第不道。とうと。至ひ。同月  
廿五日。少。越前。敦賀へ。列席す。其の間。き。朝倉家。ひ。信長。威儀也。  
て將軍家を再興せ。後。必定獻する。越前へ。礼入。あらんと。精察せ。ノ。禪  
之。既準備。急。かく。縫。小矢。年。以上。治。ありて。二條の御所。經營の。ごめ。障國  
の武。と。住。ハ。是。を。當國。進叢。の。分。撥。うらんと。詳。を。あ。て。江越境の要  
崖。小敵。構。へ。そ。き。の。み。から。ぬ。諸。而。の。城。中。小。兵。士。と。投。置。防。禦。計。方。禦。考  
き。しが。い。の。沙。活。か。も。及。を。ぞ。と。岐。阜。退。陣。へ。ク。る。小。よ。う。臂。骨。を。張。極。矛。を。固  
め。待。軍。斐。も。か。く。税。氣。と。税。き。ぬ。當。春。も。又。織。田。の。君。臣。而。縁。き。う。れ。ふ。上  
洛。せ。一。冬。密。小。京。都。間。者。を。遣。し。實。畠。の。曉。漠。を。窺。せ。る。小。越。前。叢。向。の  
風。説。か。う。間。者。走。地。小。移。て。返。し。注。伸。せ。一。小。老。屋。候。義。軍。小。兵。と。言。付。て。  
一。應。當。國。敦。復。の。郡。金。が。持。少。く。勝。戦。を。べ。至。陳。小。義。軍。大。軍。を。帥。て。攘。云  
を。べ。と。後。宣。う。遠。小。金。子。峰。の。據。を。朝。食。中。勢。少。捕。京。恒。と。い。ふ。御。食。九。御。左  
満。つ。景。記。入。道。伊。丹。の。二。男。を。け。じ。り。兒。京。脱。卑。世。セ。一。景。恒。を。り。て。家。督。も。と。

智勇絕倫の壯士きよし。義景族ぎけいぞく。朝倉家あさくわ。同是は像く頗愚まことに。是小  
よりく金を落おちて。三千金強の精銳せいえい。要崖堅固ようがいけんぐ。小牢城こらうじやう。備そなへ  
去年構設くわくせつ。金が崎の株すら。小築おさ。木筒もくとう。石筒せきとう。要崖堅固ようがいけんぐ。當國とうくに。双ふたご  
要崖ようがい。されば寺田采生てらださいじゆ。年とし。五百余騎よ。成な。立たつ。遠とほ。あらざか。小加勢こかぜ  
して。足田あしだ。左さ。右う。津波つなみ。高たか。信領しんりょう。千せん。五ご百ひゃく人ひと。相割あわせ。一いつ。  
象ぞう。恒こう。大だい。小こ。力ぢ。せ。得とく。遯とお。小校ここう。ひたこ。まき。と。縛と。定さだ。め。り。然のん。を。ど。に。鐵てつ。田た。信しん。長なが  
十じゅう。年とし。除じよ。騎き。大だい。軍ぐん。と。帥ひき。四よ月つき。廿にじゅう日ひ。破壊はかい。越前えちぜん。私わたくし。勢せい。あくとも。山海さんかいの  
涌わく。崩くず。よ。像ぞう。く。られ。ば。國くに。中なか。の。貴賤きせん。老おとこ。初男はじめのこ。女めのこ。怖おそ。懼おの。金かな。崎さき。と。半筒はんとう。峰みね。要崖ようがい  
逃隱おとひん。きぬ。胸むね。小信長こしんじょう。諱いみ。議ぎ。し。と。金かな。崎さき。と。半筒はんとう。峰みね。要崖ようがい  
多おお。攻う。る。小こ。火ひ。見み。先さき。と。せん。方術ほうじゆ。小こ。と。あ。り。る。と。財ざい。智光秀ちこうひで。重じゆ。り。も。や。う。  
小官こかん。先さき。年とし。當國とうくに。小姑こきよ。避止ひし。せ。一ひとり。而より。て。福ふく。そ。國くに。の。風儀ふうぎ。を。細ほそ。り。朝倉あさくわ。の。家いえ

小老臣こじゆ諸士しよし。雲くもは像ぞう。く。有あ。可こ。以い。可こ。半はん。金かな。是ぜ。集あつ。弱よ。あり。其その。中なか。小こ。唯いづれ。獨ひとり。金かな。崎さきの  
城じやう。朝倉あさくわ。中なか。勢せい。少すくな。無な。京きやう。恒こう。又また。不ふ。大だい。勢せい。少すくな。無な。要崖ようがい。堅かた。固いと。の  
全ぜん。子こ。騎き。と。古いき。舞まい。と。之の。密ひそか。易やす。居ゐ。株すら。か。一いつ。之の。半筒はんとう。峰みね。要崖ようがい  
壓お。守まつ。と。必ひ。至いた。然のん。一ひと。方ほう。と。攻う。る。方ほう。と。言い。小こ。大だい。本ほん。秀ひで。吉よし。進すす。之の  
出で。發は。小こ。光ひかる。秀ひで。當國とうくに。小こ。住すむ。居ゐ。被は。心こころ。記き。あ。之の。安あん。危き。強きよ。膽たん。小こ。精せい。り。是ぜ。將わ  
佐さ。の。扶助ほじょ。を。く。取と。う。を。然のん。ど。も。一ひと。方ほう。小こ。壓お。守まつ。と。置おき。の。計器けいき。の。生なま。を。往むか。く。す。全ぜん。之の  
朝あさ。食く。累たまご。堅かた。勇いさ。糧りょう。不ふ。敵てき。の。士し。將わ。ぐ。ら。偶う。一ひと。計けい。と。行ゆ。む。忽すこ。地じ。落おち。去はな。て。一ひと。國くに  
と。半筒はんとう。峰みね。と。之の。要崖ようがい。堅かた。固いと。の。小こ。堅かた。小こ。對たい。  
一ひと。夜よ。と。過くわ。去はな。翌日つと。へ。心こころ。是ぜ。義景ぎけい。大だい。軍ぐん。と。引ひ。率りつ。と。後あと。接つ。せん。事こと。難むず。ひ。然のん。小こ。加か。勢せい。  
よ。う。て。遠とほ。等だい。の。城じやう。一ひと。時とき。攻う。小こ。せ。がん。ば。あ。ら。ぞ。此こ。ぞ。奇き。計けい。と。用もち。所ところ。方ほう。湖こ。野の。筋すじ。安あん。  
たた。と。東ひが。溪せき。ま。北きた。信長しんじょう。小こ。も。遠とほ。義ぎ。小こ。同どう心じん。取と。玉たま。さ。ら。時とき。移うつ。を。半筒はんとう。峰みね



が軍へ推進せよ。と某へ準備をなす。秀吉密小遣謀計の信長へ言ふ  
せーべ速くもおきと會得したまひ裏分配と下知しるふれも遠き箇ヶ軍事とゆ  
た。上方諺頭不連綿くも六要崖堅固うといふも背向の大泥少く馬の進退  
不自由なるえあると憑んで柵とも絆を審査も又等闲く。然るに遠方の  
攻術。まづ木下千余騎面方小推進せん御めかば金が崎より援軍來らん。  
其時木下兵士を分離始くことを防戦ひ備輪く退く所へ城兵を詰らぞ擊  
て秦金を擣勢小力を勤む。前後を被で敵んと。うち胸紫田坂井をりつて。  
城下麓小埋伏を置。攻勢を協定の跡を断截。伊勢の加勢の南よりせを。  
畿内の大門和田松永と北の方より捲幕よ。背門は是大將信長。三日更執  
役被らん。備毛に佐久間森治田。ハ五千余騎小て金ヶ崎へ情を地小弛ぬ。家臣  
手筒を教えんと聲こゑ讀へ。附幕毛。然そと。と累順後援を止む。幕び後へ退却

さん所と佐久間森治田。よく戦を時も劣らず。金ヶ崎まで。緊取らん。小密懇  
かと指揮玉。バ僕領憂と驍起。持揚くへ。轍向を。然かど木下秀吉  
ハ西門に向ふ先陣分毛。二千余騎小て森地小推進。而し。猶也。二千餘騎。  
先陣の秀吉小て二陣へ。行中軍を衛す。大軍と小軍で。遠隊の軍。二千餘騎。  
余は十萬小も猶勝ひと。進退さわざる。木匠の像。秀吉既小猪く進く。木筒  
が軍。小道に。鳥院。擊轍。喊とつう。一時小福。さん威勢。と。優に。城兵。がて。殆  
だ。事由。今更。悔く。軍も。力と。禍。て。防戦。秀吉放意と。優に。城兵。がて。殆  
時を移す。あり。今。全が筒。も。所。ノ。も。大。殊。を。朝。軍。中。勢。二。千。余。騎。ふ。て。  
發進。若。此。讀。と。利。能。と。西。圓。小。備。伏。攻。愈。行。中。事。を。湯。こ。見。て。半。立。て。  
鶴翼。小。張。火。水。小。氣。と。戰。や。木。下。勢。ハ。城。小。向。て。捲。起。く。後。矢。が。後。援。の  
軍。勢。地。と。行。中。勢。小。擣。せ。づ。と。大。強。不。續。一。た。怨。と。と。侵。侵。小。起。噪。け。

城小あひたる。北國左近九股右近候。耽々覗く。備も接糸は来る。小よう進。各の隊伍へうた足をうごぞ。先俺们も擊て參。双方挾み進。まと敵ノと城ノと間ひて五百金縛。義地小赤て不毛が木ト幣も大小猿櫛前ぐ。小こうと引退く。遠時朝倉景景極ハ行軍勢と戰ふたしが。鐵田勢四百十間道。金が濟シ。轍もんと推進。事急分ふ中。若もと忻て大小懸き。禪と防禦か乃方側ハあきど。進。若大勢後退と。軍も弱も。難をうべ。手筒が疎小進。敵も一撃攻と退。我援も功も達。方陣ハ居城も大車を。疾患退。退却せと指揮を傳へ。素恒シ。後殿を退却せと。竹中も。食が疎と退幕を。木ト幣小合陽せり。紫田坂井ハ三千余兵。城の櫓小怪けせし。近國九役が城中。走て出るを得と沈黙。今こそ謀し時刻。走る。室崩せと。二千余人喚叫んで駆く幕。近國九股の五百余兵。堅忍して

岩。退揚んと。走く所。木下竹中。左右より逼か。敵へ。追極攻起。と。南。魏列武者。小伏勢。立畿内勢。水漏さと。推極。ノ。城を。いそ。協。之。千傾。萬倒。うち。小匹田九股も。戦ひ廢。主。魏軍中。小戦死。されば殘る。魏軍人。本體。廢。敵も。負も。あり。通す。も。あり。鐵田勢。うち。其。遙响。本下の一隊を。射。投。の。敵。百五十級。柴田坂井。侮。已。不準。小。兵士。ハ。將。中邪と。見。る。よ。う。防禦の力も。弱。果。い。を。せん。と。憫。然。う。れ。ど。も。あ。ら。せ。で。二。方。より。喊。と。そ。そ。籠。ひ。幕。ま。ぐ。彌。生。ま。と。不。途。と。失。ひ。懼。怖。と。体。を。ま。え。城。の大將寺。田宗。女。不敵。の。勢。士。弱。り。多。が。壁。も。膽。を。諸。軍。を。励。ま。し。必。死。と。覺。得。した。上。ハ。仰。の。懼。と。不。免。る。死。ね。や。と。序。も。う。旋。い。こ。と。不。大。に。し。ハ。力。と。得。く。拒。抗。ん。と。を。見。ざ。心。不。任。せ。ぞ。隊。伍。も。く。う。う。体。と。信。長。得。と。脚。障。あ。り。その。背。門。と。騎。擅。や。進。先。く。と。指。揮。し。玉。ふ。丹。羽。立。扉。を。金。の。前。又。奮。門。



佐内藏助歿りとも小大泥をりはとも恩をも。狹詔と據て久々遂に背方  
と騎破すも水の路と切墻。諸軍の陣並に火と懸る其の後坐勢列勢  
南の方と打敗され柴田城井の面門と手を投立畿内勢の北より突き投落方の  
軍勢連迷方を私入にて斬り盡す。城共一個も遁き得を。數を累て戦  
死せり。寺内家女津波甚四郎。今へこままで折りと覺れし。利害を死じる  
者不了得。小倉一丸年筒が峯も只一日小船失ひ。巴軍殺よしと信長也。  
直躍せらきて歎悦あり。木下の計略と諸将の勳功を賞へ。毎ひぬ

## 朝倉景恒猛勇血戰近軍属金崎両城

一計成ば萬計宣する。年筒が峯の要崖も戦ひ終て四時近く。  
敵をみせし小今ハ松嶺田の勢威破竹の像く。此を勤と脱を推す。そ  
合に勝ち。政隆さんと惣毛輩もあり。當天も中少迫り。是れ今宵

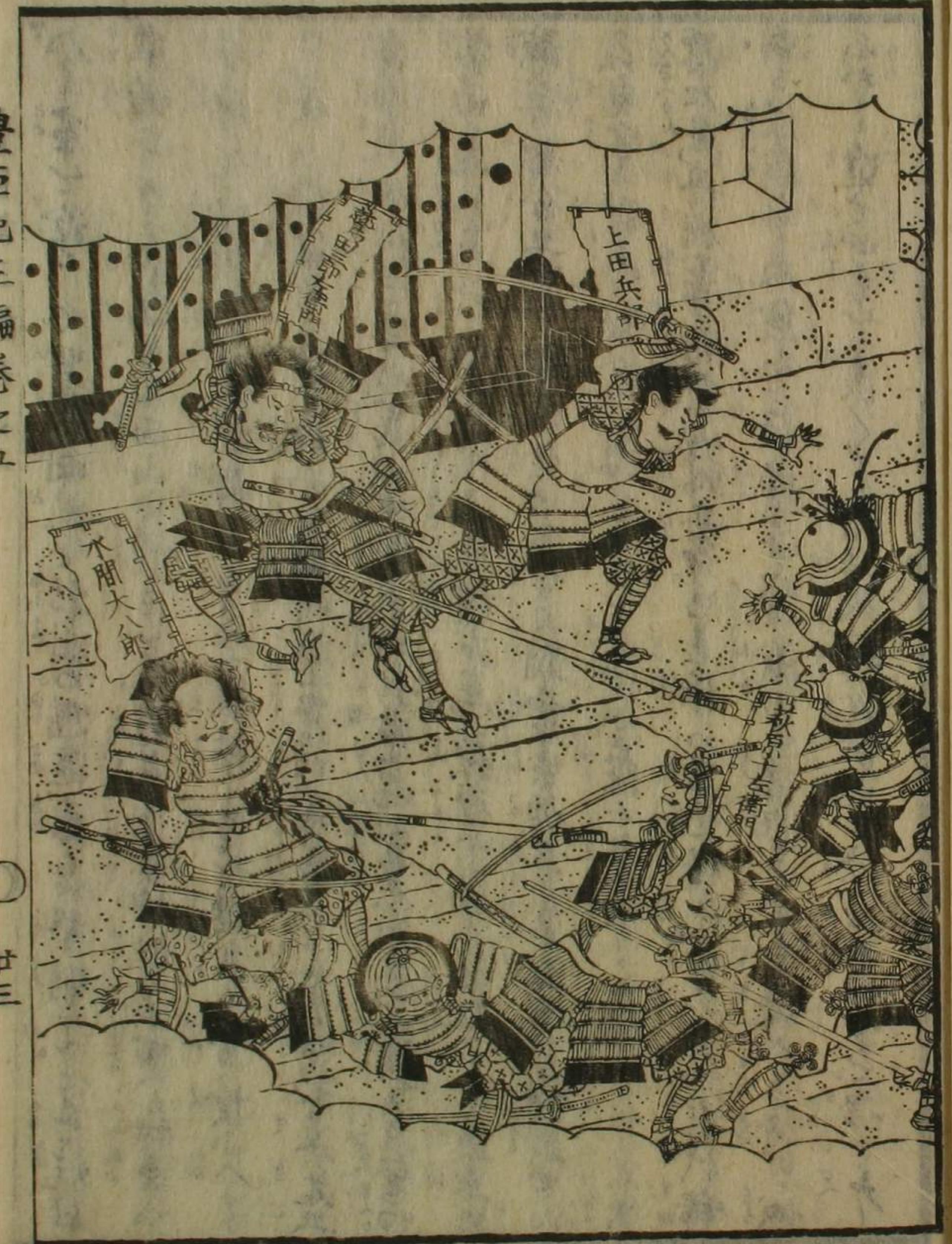
八諸軍小休憩を。曉まで四月廿六日寅小休憩を。予て。狩の一天小椎出  
し。金が浦のぞ向をまくる。然かどに朝倉中勢景恒ハ昨日年筒が峯の後  
援として軍途まで趨く。金が浦の要崖も戦ひ終て城と警さんとまち小  
野代に退逐したる。宿泊小休久間信慶池田信綱森可成が立年筒。株  
主一個も遁げられせし。と勢強く突發する。小栗恒原景久力少して。雪種抜群  
きりまく。豈かも屋を自掛小向ひ敵は又軍あつける。汝们をもす。一弱主  
の軍とさんと思ふ。うちも只正面の敵地を破り。純括んことを要とせよ。疎そ敵  
笑ひをうか進んで生る語あるとも退去して遁き。地へあきと。雪を重て倉く励  
ませば。膳をも。やまも見つ。まゆへ。京極大木號移び。二千余人を。兵糧小備え  
ひきも。いとや。も。ひとを。激波の巖小當る。像く。一まもせを。窓て。投右小當。左小拂。ひきも。のくも。を  
采ふ。そ。敵破らんと擇けども。不得の。猪久間森池田種利等くまへ戦ひ。

通へせどと樓ひりきば弦指べくとも思えまざしが。累恒主從ましく憤  
懲し。遙敵兵を敗らんば英雄の名を失ふべー。とまじしく烈しく嘆むる  
心を響かく當うごく。鐵田勢運小攻めさき。たれへ頭と教訓を承恒  
國をとう大喜あげ。もと軍の軍の斬獲するぞ。犠りや兵士も駄よと馬  
を擣起て敵をまに漸く一すをうち破る。自軍の勢を顧みず。千鶴計を  
残す。然ども累恒學も座せを。歎歎うて退くも。鐵田勢かわも遁け  
まじと歎く跡を退蒐走り。食が等近くゆづらぬ。累恒院と晒せ。追  
來了敵兵を豫み。遙停城小退入らば。宿室を投小せらるべ。踏止みて  
防へ。進來了敵と拂ひ乍と駆車をもへ城を累恒院の柄の血を拭拂ひ  
退去。馬跡と前後小達退来。敵と待蒐う。鐵田勢と見うつるも。又  
一様小捲着ま國を捨ま。城中へ着相させよと丑午餘騎面も振ふを極め

幕。累恒院の軍をまへ。此ぞ勇氣と敵兵小刀を胸に腰を消させんと  
事あらう。すなはち大喝一声。喚く。大軍の中小狂招退つ返りの戦ひ。血へ混じと  
油場小流まで。馬の蹄も没さるをも。向ふと橋伏を駆伏せ。船も盡して般舟  
をも。進去の大軍。展游。息と縁せぐ。改めし。全別處又とも變更較一  
系恒。今ハ全く疲果。既小危く。要て。零。城中小あし一千余人。圍困を安ひて  
破て。廢吏代く拒抗。不ぞ鐵田勢。大軍をひとども。移刻の戦ひ。不勞をし  
く。部隊の城を小狂起ら。四日後。退逐す。そ隣小累恒自勢と率  
圓。すなはち。城守へ死へば。然ども佐久間森也。因退逐して。宴て向ひ。引ひ。き  
も進んで。着相んと。喚叫。を攻起。是とも。朝倉謙代の勇士達。二十人。誠ア  
之。斬く。根六七遍か。も内小城を駆す。革多く。進も。あまて。討死をし。根  
際。小嘴少く。戰死。一とき。進去も。右折く。進を傷だ。妙倉房も。城中一退

金ヶ崎危急  
朝倉家  
三十五個の

勇士  
閨風際  
戰死



八一軍を詮として四方の閑風と村國め猶進来らへ擊倒さんと多死は  
準備かくうちも小日も西山小便をしきる進去も重時休りて信長の  
奉陣より城攻へ附日と指揮ゆきゆへ殿招へ首と拵集め實檢小へう  
弓。厥ら誰渠ぞと名と推小之照峰御七帝。同軍在主。上田義教真木立  
寄左衛中村義庫助。高田中勢。土山彰右衛門。菅生左衛門。岩井義左衛門。  
篠田三郎左衛門水間大八衛。山本檜右衛門。秋原十左衛門。和田の軍の  
誠とも都合五百万餘級。然ども今日朝倉京極等常からざる防戦せし  
ク。自方の殺卒八百余人喪とありして中少林十郎三郎之福勝市東原  
源左衛門。丹羽秀虎紫田源五郎。こまゆの名を得し勇士也。近代稀  
少烈戦うる奴。然れどにあらず廿六日鐵田の櫛松十万余騎。食分清の城  
小か一進せ四方を表しくと推想卷蝶蟻の出る隙もあらせど。嘆息声

て攻りる後小摺前もせん黙風あり。株將系恒をもしも虚せと勇氣烈しく  
陷をくる。昨日の軍小從京都。六社と義都兵翠をも。今ハ附ぐ小摺も。弱  
御て見(タリ)。景恒も苦小惆然と軒架てそ立つた。信長志小攻瀬さんと  
諸隊へ養へく指揮をなす。秀吉奉陣小參へ。隸と対を寧をう。今  
當城の風情を推量り。小攻瀬さん。織田景昌と。星北陸七列セ仁枝  
一王ふ軍首られ。偏小武威を尽さん。且仁喜の御計を婦もしくねむ也  
。詮助。後く城守へ使番を遣られ。岡城の義を命達さと。勢よぶの兵士  
残らを。謝助余をくみふと。勤免東ひそひも。信長かも實もとおがきと  
志角。心次第小計を。と。今よと。もと。もと。もと。もと。もと。もと。もと  
城中へさし遣し。弓矢把。身へ然る事なき。當城の脇を遠くらぬ。僕らの

防禦として、急遽小諸車と毅さん車。傷ましくはらず。軍く城と岡を平す。  
大將もトゆ徳車も。残りを助命相違なし。役一兵が皆小帰らモたまひ。  
累て武畠と謁し。方も大勝利の如事ならず。信長深く大將の御拳勲  
と感佩し。戦死し玉もん車と謹む。折々嘆き。勝利の如事ならず。信長深く大將の御拳勲  
如何きみ金城を如く。今も毅車も當果防戦の臂力をもあら。我僕々金車  
とも右も罪なれ。毅車と毅さんこと。いづれも不便小辱候。志と不ぞと金小隨ひ。  
當城と金城申し。と懸懃小返着せし。本ト云の義を本陣へ置候もあれふ  
よりて、金城の攻路。陣くと主將遣う。本ト義吉舟の諸情をう。堅儀と稱  
して立合せ。城中の毅車を先小至せ。次第も小あ止く。轍裏の大いふ合戦  
味し。我おらトと遇えし。堅儀と信小朝倉義恒。世人計の後者をも畢し。  
宿く然と連携。秀吉野く。龍川彦左衛門。山田三左衛門の二小金

ヶ橋を靖取せ。因まく自勢を引分て。五百余人を最後小舟。系留。主役と  
ち渡せ。府津の邊まで送らを。豈が實少焉。情あ。舉止う。と感ぜぬ  
車こそをう。其後金ら甚の如

